

第4章 系譜と所有

4-1. 家族と父系の系譜

結婚後にも祭のたびに女性の実家や男性の母方のオジに贈られるブタ肉やロクシ（蒸留酒）は、妻の実家の家族（kim C.）が消費する。家族とは、収穫された穀物や肉などの食料を「ともに（pre P.）食べる」単位だとされる。

M村では土地の相続を繰り返すうちに各家族の畑が分散したため、人びとは家族が所有する比較的大きな畑に出作り小屋を建て、そこに泊まり込んで田畑を耕す。そのため、核家族以外の大家族では、同一家族内のいくつかの夫婦（jahān N.）、つまり親夫婦、子供夫婦、あるいは兄弟夫婦などのあいだで分担を決め、それぞれが年に数ヶ月、出作り小屋に住むことになる。夫婦によっては1年12ヶ月すべてを出作り小屋で暮らす例もあり、その場合は家族内の他の夫婦と物理的にはほぼ完全に別居状態¹で、実質的に「食べる」のも別々である。それでも、出作り小屋で暮らす夫婦も家（kim C.）に暮らす夫婦と生産消費の単位としてひとつであると言っている以上は、ひとつの家族と見なされる。言い替えると、同一家族内の夫婦間で食物のやりとりをしても貸し借りの関係にはならず、負債感覚も生じない、ということであり、それぞれの夫婦が別々の家族として分離してしまえば、食物のやりとりは自由でなくなる、ということになる。そのような、家族は、儀礼のとき必要とされる供物を共同で負担する単位でもある。

前章で見たように、家族は必要に応じて近所の家族のうち、父系の系譜を辿って比較的近い関係にある家族と婚資の調達・分配を共同でおこなう。つまり、近所であるという地理的な近さとともに系譜的な繋がりが重要になっている。そのような父系の系譜は、土地の相続においても大きな役割を果たしている。男子が生まれなかった夫婦の土地は、夫婦が亡くなったときには女子には相続が許されず、夫の兄弟やその子供、あるいは父系の系譜を辿り最も近い関係にある男性（たち）に相続されることになる。M村の例では「父は沢山土地を持っていたのに、私たちは土地を失い苦労してきたんです」と語る3人姉妹がいる。

家族が分裂する直前には、あらかじめ土地がそのなかの夫婦ごとに均等に分配される（父系の均等分配相続）が、そうした分裂直前の例外を除けば、家族が基本的な土地所有の単位だと言える。では、その家族という枠組みを、女性を「排除」しつつ、土地の所有を巡って構成していく父系の系譜原理とは、どのようなものなのか、そして、その連結を支える力の源泉を、人びとはどのようなものとして捉えているのだろうか。

4-2. 系譜の起源：始祖の物語

M村の土地所有には二つの流れがある。ひとつは、先祖代々父系の系譜を辿り、受け継がれてきたというもので、この村にやってきた始祖ジェレラン（jereran P.）を

起源とする。

ジェレランの物語に詳しいチャンドラ君から話を聞いた。

私たちの昔の祖先はサルリン (sarlin P.) という村にいました。そこで村人たちが、ある日、魚を獲りに行きました。ヨーの木の種 (yə.rə C.) の魚毒を持って行ったので、それを川に撒いては魚を獲っていきました。魚たちは、魚毒を避けて最後に深くて大きな淵に集まりました。

村人たちは、何とかしてこの魚たちを獲ることができないかと相談し、獲ることができた人にはクトウグリ・プラジャ (kutuguli praja P.) という称号²を与えることになりました。しかし、村人たちは誰ひとりとして、淵に隠れた魚を捕まえることができませんでした。

そのとき、チュワバイ (cuwabhai P.) という人が、私が獲ってみせると名乗り出ました。そして、魚を獲ることができたら本当にその称号を認めてくれるのか、村人に問いました。村人たちは、認めますよ、と頷きました。チュワバイは「陽が落ちるまでに戻ります、戻らなかつたらそのまま立ち去って下さい」と言い残して淵のなかに潜りました。

水の底で、チュワバイは、歌をうたい始めました。大蛇の夫婦と一緒に歌っているのです。大蛇は、チュワバイにアム (ご飯) と肉、ロクシ (蒸留酒) にハン (どぶろく) をご馳走しました。

そうこうしているうちに、夕方になりました。もうチュワバイは死んでしまった、と言って村人たちは立ち去ろうとしましたが、そのなかの1人が、戻るかもしれない、もう少し待ってみよう、と言いました。

そのときです。大蛇の夫婦と別れたチュワバイが、6メートル以上もある大きな竹かご一杯に魚を入れて、水からあがってきました。

村人たちは、ああ、チュワバイは本当に約束したとおりにできたのだ、と言いました。

チュワバイは、村人たちのところにやってきて、あなたたちとの約束のものを持ってくることができました、と言い、村人たちにクトウグリ・プラジャの称号をくれるのか、尋ねました。

村人たちは、チュワバイにその称号を与え、その後クトウグリ・プラジャのもとに食べ物を貢いだり、労働奉仕に行ったりするようになりました。

その後、チュワバイは、マイセラン (maiseran C. マクワンプール郡のある村の名) という村に移り住みましたが、村人たちはサルリンからここまで労働奉仕に行っていました。チュワバイの移住先で、ジェレランという男の子が生まれました。ジェレランは、そこで大きく育っていきましたが、チュワバイはある日死んでしまいました。

その後、ジェレランは、この村 (M村) のゴクリン (goklin P.) というところにやってきました。サルリンの村人たちは、ここまで労働奉仕に来なければなりません。

苦労したサルリンの村人たちは、ある日、集まって相談しました。そこで、もうこんな遠くには行ってはいられない、なんとかしてジェレランを

殺してしまおう、ということになりました。そして、私たちの村に一度来て下さい、と招待の報せを送りました。

ジェレランは2人の息子、ブドウバン (budh bhan P.) とバハイ (bahai P.) を連れて、サルリンに出掛けました。

途中、ジェレランはミート（儀礼的な兄弟関係にある人）の家に立ち寄りしました。そしてミートに、村人たちが私を殺そうとしています。殺されたらもうここに戻ることはないでしょう、殺されなかったら戻ってきます、と言いました。ミートは、彼らに食事をご馳走し、皆眠りにつきました。

ジェレランの夢にカシリ・バニリ (kasili banili P.) というシミ（地神）が現れ、言いました。「おまえに5日間、それぞれ5 ムリ (murī N. 計量の単位, 1murī は約91L) の水とダール (dāl N. 豆のスープ)、コメのアム、そして5羽のニワトリ、5頭のヤギ、5頭のブタ、それらの肉が調理され出される。さらに、5つの大ツボに一杯のハン、同じく5つの大ツボに一杯のロクシが出される。だが、おまえは満腹することなく、それをすべて食べ尽くしてしまう。恐れることはない、私がおまえの食べたものを受け取り、棄ててしまう。おまえは勝利する」。

翌朝になり、ジェレランたちは起きました。ミート夫婦はそんなところに行くことはない、と説得しましたが、ジェレラン一行は出ていきました。

やがて村に到着しました。村人たちは、さあ、ジェレランたちがやってきたから、ニワトリとヤギを解体しなくてはいけない、と言い、準備を始めました。マンサラ (mansara P.) というジェレランの兄嫁が鎌を研ぎ始めると、「マンサラ、ヤガユグ（擬音）鎌を研ぐ、ジェレラン・バイ (bhāi N. 弟) を殺そうと」という声が聞こえてきました。ジェレランは村の兄弟たちが随分恐ろしいことを言うなと思いました。

そうこうするうちに、5 ムリの水、ダール、コメ、5羽のニワトリ、5頭のヤギにブタ、5ツボのハンにロクシが出されてきました。ジェレランはそれをすべて食べ尽くしてしまったうえで、「村の兄弟たち、お腹が空きました、まだ満腹になっていません」と言いました。

それを聞いた村人たちは「あなたのために用意した食物はもうなくなりました。私たちはもうあなたには手出ししません。本当は、あなたを殺そうと考えて招いたのですが、できませんでした。あなたのお父さんが賭に勝って得たクトウグリ・プラジャの称号を、ここで取り消して立ち去って下さい。私たちは、あんなに遠い村にこれ以上行くことはできません」と言いました。

ジェレランは、「そんな理由で私を殺そうとしたのですか。私にはそんな称号は必要ありません。放棄します」と言ってサルリンを去り、この村に戻ってきました。

なお、この物語を教えてくれたチャンドラ君によれば、この物語に登場するM村の始祖ジェレランから、彼の祖父の世代は、7世代目だという。

さて、この父系の系譜の起源についての物語から、私たちは何を読み取ることがで

きるのだろうか。まず、クトウグリ・プラジャという称号の存在から国家などの制度との繋がりを指摘できるだろう。

では、チュワバイがそのような称号を得、村人たちとの賭けに勝った勝因は何なのか、そして、のちに自らを殺そうとした人びとを打ち負かしたジェレランの勝因は何なのだろうか。まず、チュワバイについてである。チュワバイが魚を獲ることができた背景として、あらかじめチュワバイが何か特別な能力を持っていた、というようなことは一切ふれられていない。チュワバイが魚を獲って戻る前にしたことと言えば、その虚の住人である大蛇夫婦と歌をうたい、もてなされたことだけである。つまり、その土地の住人と歌をうたい、もてなされること勝因になっているとしか、この物語からは言えない。それはどういうことなのだろうか。

チュワバイが淵に入るまで、そこは人間が深く立ち入り、それについて何かを知ることのできない空間であり、その意味でそこは人が差異を確認することのできない場だった。そして、チュワバイがそこに入り込むことで、知り得たのが、そこには大蛇の夫婦がいる、ということである。ヘビは水のなかを泳ぎ、雨季に森に現れるので、大蛇ともども水の象徴と捉えることができる。そうすると、チュワバイは水の夫婦と出会い、水のなかに性的差異を見出したことになる。チュワバイは、そのような性的差異を背負った存在と戯れ、それらからの贈与を受け取ることで、賭に勝ったと言えるのである。また、ここから差異を確認できない場に自ら飛び込むことではじめて見出された差異は、夫婦つまり性的な差異であり、それが差異の根源として人びとに想像されていると言うことができる³。

ジェレランについてはどうか。ジェレランは神により、いくらでも食べられる能力を授けられ、それによってジェレランを殺そうとした人びとを打ち負かす。では、いくらでも食べられる能力とは何か。まず、殺そうとした側が何をしたのか見てみると、基本的に沢山の食べ物や酒を出してもてなす、つまり、過剰な贈与をおこなう、ということである。それに応えて食べ続けるが、食欲は萎えることがない。そして最後には贈与が不能になる。ここでは、贈与（自己から他者への「切断＝接続」力）と欲望あるいは消費（他者から自己への「切断＝接続」力）の争いが繰り広げられている。そして、勝利するのが欲望・消費である。

だが、贈与に対する欲望・消費の一方的な勝利ではない。欲望・消費の側、ジェレランはサルリンの兄弟に対し、過度な欲望を兄弟にぶつけ、贈与（労働奉仕）を強要しそれを消費し続けていたが、その過度な欲望を放棄することで、この贈与と欲望・消費の物語は終焉を迎えるのである。結局、贈与に対する欲望の優位は示されるが、過度な欲望は否定されることになる。

その過度な欲望・消費とそれを人びとに認めさせる称号が否定されるのは、兄弟との平等的関係においてである。さらに、過度な欲望の殺害者として象徴的に登場するのは、その兄弟関係に入り込んだ女性（兄嫁のマンサラ）である。

こうして、ジェレランの物語からは、兄弟間の平等性と、そこに侵入する女性という外部による、称号や一方的な欲望・消費の否定、という構図が浮かび上がってくるのである。

始祖の物語からは、差異の源泉には性差があること、贈与に対して欲望・消費が勝利することが描かれ、同時に父系の均等分配相続が予感されるような兄弟間の平等原

理と女性の外部性が示唆されていることがわかる。このような男性中心主義的な筋書きがこの物語の奥に浮かび上がり、それが女性の相続を「排除」した父系原理を支えているようにも見える⁴。だが、女性の外部性の起源は、これらの物語には描かれていない。また、M村でこの物語を語ることができるのはチャンドラ君と彼の母親の兄弟姉妹だけで、村人が皆物語全体を理解しているかどうかははっきりしない⁵。

ただ、ジェレランについては、上の物語とは別に、村人の多くによって共有されている以下のような話もある。

この村には 16 人の兄弟が住んでいました。ジェレランはその兄弟に仕えていましたが、ある日兄弟たちとともに役人に呼ばれました。

そこで、これからこの村の村長を決めるといわれ、全員の額がさわられました。そして、16 人の兄弟たちの荷運びを毎日していたジェレランの額が一番硬い、と言われました。(荷運びは額にヒモをかけておこなう。) それ以来、この村はジェレランが村長となって治めるようになり、16 人兄弟はこの地を去ってしまいました。

この物語では、国家の影が濃くなるなか、上の物語で見られた構図が反転しているのがわかる。つまり、贈与(労働奉仕)する側のジェレランが、それによって得られた身体の強度により、一方的な搾取(欲望・消費)をしてきた16人兄弟に勝利するのである。

4-3. 所有の起源

上に見たような父系の系譜概念により、村の土地は分配され相続されている。実際、村のなかを歩きながら、土地所有について訊いていくと、村の土地が「祖先の時代から」父系で分配されてきたことがよくわかる。だが、土地所有は、そうした系譜概念だけで決まっているわけではないことに、ある出来事がきっかけで気がついた。

T氏がW氏の家からものすごい剣幕で怒り、まだ興奮さめやらぬ感じのまま帰ってきた。一体何が起こったのか訊いてみると、T氏が所有する焼畑用益地をW氏が勝手に伐採して焼畑にしてしまったのだという。後日、T氏に再会したときに、その焼畑がどうなったのか訊いてみた。

T氏は「もう話が付いたから大丈夫」と、機嫌良く言う。そして、「結局、焼畑はつくらせるけれど、土地は手放さないという確認をとったから」と続けた。

つまり、焼畑を伐採すると、その土地は伐採した人のものになってしまうことがあり、T氏はそれを心配して怒っていたのである。そこで、何人かの人に話を訊いてみると「W氏の常畑のほとんどが、10数年前にW氏が伐採して彼ののものになったものだ」ということがわかった。他にもそのような「伐採して所有者が変わった」とか、「その前はただの森だったのが、伐採してから彼らのものになった」という話をいくつか聞くことができた。

また、J氏という人が亡くなり、子供がいなかったために土地が父系の親族に分配相続された、という話を聞き、その詳細を確認したところ、相続の権利を持つ家族の一部に土地が分配されていない、ということがわかった。そこで、さらに調べてみると、同様な事例がいくつもある、ということもわかった。

ある事例について、相続と関わりがなかったある男性に、相続の権利を持つある男性が土地を分配されなかった理由を訊いてみた。

当時、彼には小さな息子しかいなくて、土地をもらっても1人で畑として維持できないからと言って、もらわなかったんですよ。

このように「土地を維持できないから」というのが、土地が分配されない理由としてあげられる決まった答えである。また、上で見たように、最近でも焼畑用益地を借りる人は「あなたは、畑を維持できていないから私がやります」と言って借りている。この場合、借地料はただである。常畑の場合は今日では借りるのも難しくなり、借りられるのは姻戚だけになっているが、やはり借地料はかからない。娘が嫁いだ家には「畑として耕していられるうちは、ずっと使っていればよい」と進んで貸す。

こうしてプラジャの人びとにとり、実際に利用するかどうかが、土地所有の根本にある問題だということがわかる。それでは、上記の系譜上の関係から土地が分配、所有されてきたという話はどうなっているのか、村人に問い直してみる。

昔はヨーの木やマンゴー、イチジクの木的所有が系譜上の関係で割り振られていたんですよ。そこをそのまま自分の畑にした人もいれば、そうならなかった人もいる、ということです。

ここまで父系の系譜で土地が分配されている、と論じてきたが、もともとそれは用益権に過ぎなかった、ということがここからわかる。土地所有があり、その土地に属す物の所有が決まっているのではない。

したがって、利用しないのであれば、権利も失われていく、ということになり、土地も使わないでいけば、他の人のものになってしまう、ということである。昔は村の外部からやって来た人でも家系が途絶えた人の土地を乞いに来たら、与えていたとM村の人びとは口を揃えて言う。

では、果樹以外の用益権はどうなっているのか。例えば、果樹から落ちた果物。ヨーの木の実は、そのままでもタルーの村やバザールに持っていけば、コメと交換したり、現金で売ったりすることもでき、また、その種は、わざわざ商店主たちが現金で買い付けにくるものだが、これは誰がとってもよい。採った実を換金すれば、そのお金も採った個人のペワ（財産）になるので、小遣い稼ぎの小さな子供を含め、老若男女が懸命に集める。

焼畑用益地にある木から薪や飼料用の葉を採るのも断る必要がない。森林が後退してきていても、「これを断ったら皆生活が成り立たなくなり、黙ってはいないだろう」とM村で1, 2を争う土地の所有者は語る。

また、近年は、おかずが少なく苦勞すると言われるなか、マスタードやソバの実

を収穫したあと自然に種が落ちて畑に自生してきた芽や菜っ葉は生活上意味ある作物だが、それらも誰の畑からでも自由に採ってよいとされる。

このように、系譜関係が土地所有に重ねられるまでは、果樹の樹上にあるものと人が耕している土地以外は、ほとんどの資源が村人全員の利用に開かれていた、と言えるだろう。

ここまでの議論で、土地所有以前に利用があった状況は見えてきた。だが、利用の前には何があるのだろうか。ものを利用する身体なのか、身体による労働なのか、あるいは他のものなのか。すぐに答えなので問題ではないが、その問いに一定の解答を与えてくれるのは、つぎのような事例である。

誰かがしるしを付けたハチの巣を青年たちが勝手に火で炙り、ハチの子をとってきたという話をある男性が耳にした。その人は「最初に目をつけた人が所有者なんだ。決まりを破っては駄目だ」と言う。

ウインの猟をするときに作る安座台の場所は、はじめに目をつけた人がそこを利用でき、それはその人のペワになる。土地が誰のものかは関係ない。

利用の前には「目をつける」ことがあり、「眼差し」がある。それなら、はじめに目をつけた人が所有者ということになるだろう。だが、複数の「眼差し」が同時に同じ対象に向けられたら、そして「眼差し」が他の「眼差し」と衝突したら、どうなるのだろうか。

前述のM村における父系の始祖の物語も、そうした複数の「眼差し」の物語として読み直すことが可能である。その場合、複数の「眼差し」の衝突の問題にひとつの答えを見つけることができる。

川の虚を見つめる複数の「眼差し」から物語は始まる。そして、それまで誰も「眼差し」を向けることができなかつたそのなかの魚に「眼差し」をはじめて向けたチュワバイは、それによって魚を手に入れる。さらに人びとから称号を得ることになり、他の「眼差し」たちの身体は、始祖の「眼差し」にしたがう（労働奉仕する）。だが、それに不満を抱き始めた他の「眼差し」たちは、徹底した贈与によって、その状況を変えることに成功する。そして、再び自らの「眼差し」にしたがひ、身体を操ること（おそらく、その先にある消費も）が許される。人びとは始祖の「眼差し」にしたがひ、自らの「眼差し」によって得られたはずのものを始祖に贈与し、さらに贈与を徹底しておこなうことで、自らの「眼差し」にしたがひ「消費」することが許される。始祖の息子ジェレランの場合も支配する「眼差し」（16人兄弟）にしたがひ、贈与（労働奉仕）を続けるが、贈与によって得られた身体の上りしによって、逆に（村を行政的に統括する権利の）所有が認められる。

このように複数の「眼差し」が出会ったときには、そのうちのいずれかが、自らの「眼差し」を閉じ、自らの欲望により消費できたかもしれないものを譲与する。だが、「眼差し」を閉じ、譲与した者は、その譲与という行為を繰り返すことによって、再び自らの「眼差し」にしたがったり、何かを所有したりすることが認められるように

なる。逆に見れば、自らの「眼差し」のために得られたかもしれないものの贈与を繰り返す「眼差し」に対しては、贈与を受けた「眼差し」は、いずれ自らも贈与しなくてはならなくなる、と理解することもできる。

以上の資料から抽出可能なプラジャの人びとにとっての所有の根本原理は、身体の延長にある土地や労働ではなく、ものを見つめる「眼差し」の力と複数の「眼差し」同士の相互的な贈与（「切断＝接続」）であると言うことができる。

注

- 1 ただし、普段は出作り小屋で暮らしていても次章で説明するトンコロンという儀礼の際には、ともに食べ、家で寝ることになる。
- 2 現在のところ、クトゥグリという言葉を他の資料から見つけることができず、それ以上のことはわからない。
- 3 様々な物事に性差を重ねていく様子は、第6章で際だつことになる。
- 4 ただし、女性に相続が認められていないからと言って、土地所有までもが認められていないわけではない。M村にも1人土地を所有する女性はある。しかし、これは彼女の母方のオジたちが、遠い村から移住してきた男性と結婚したこの女性を支援するために、土地を分け与えたからである。なお、その女性に息子がいなくても土地は所有できる。
- 5 なお、女性であるがために、土地を失ったと訴えていたのは、その彼の母親とオバたちである。